

# パキポディウム

*Pachypodium*

キョウチクトウ科 / Apocynaceae

ぷっくりと膨らんだ塊根（コーデックス）と鋭いトゲ。マダガスカル乾燥地が育んだ彫刻のような姿で、塊根植物の代表格として絶大な人気を誇ります。

## 基本データ

🌱 成長期	夏型
🌡️ 耐寒温度	10°C以上が目安
☀️ 日照	通年よく日に当てる
📅 播種適期	春～初夏（4～6月）
🕒 発芽日数	3～14日
📍 主産地	マダガスカル・南アフリカ

## 概要・魅力

パキポディウムは、ぷっくりと膨らんだ幹に水を蓄える塊根植物（コーデックス）の代表格です。マダガスカルと南部アフリカの乾いた大地に育ち、まるで生きたオブジェのような彫刻的なフォルムで、多くの植物好きを虜にしました。

属の数はおよそ20～25種。丸い幹が愛らしいグラキリス（象牙宮）や、トゲのある柱がそびえるラメリー（マダガスカルパーム）など、姿かたちは実に多彩です。日本で多く流通するのはマダガスカル産の種類で、春から秋に生長し、冬は葉を落として休む夏型のリズムを持ちます。

## パキポディウムが愛される理由

- 彫刻のようなフォルム — 水を蓄えて太った幹（パキカウル）は一鉢ごとに表情が違い、飾だけで絵になります。
- 乾燥に強くタフ — やせた乾燥地の出身で、水を蓄える力が高く、忙しい人でも付き合しやすい植物です。
- 種から育てる楽しみ — 実生（みしょう＝種まき）なら、小さな芽が幹を太らせていく成長を一年ごとに味わえます。
- コレクション性 — 強健な入門種から、生長がゆっくりな難物まで幅広く、集める喜びがあります。

## 代表的な仲間

- グラキリス（象牙宮 / 学名 *Pachypodium rosulatum* の仲間） — 丸く膨らむ幹が人気の「王様」的存在。流通名は「グラキリス／グラキリウス」。
- ラメリー（マダガスカルパーム / 学名 *Pachypodium lamerei*） — トゲのある柱状の幹を持つ強健種。実生がやさしく、最初の一鉢におすすめです。
- ブレビカウレ（恵比寿笑い / 学名 *Pachypodium brevicaule*） — 地面に張り付くような独特の姿。生長はとてもゆっくりで上級者向け。
- ロスラーツム（学名 *Pachypodium rosulatum*） — 扁平な株姿でグラキリスの近縁。

パキポディウムの幹を切っても出るのは透明な樹液で、キョウチクトウ科に多い白い乳液ではありません。

ません。とはいえ鋭いトゲを持つ種が多いので、扱うときは手を傷つけないよう気をつけましょう。

## 置き場所

パキポディウムは一年を通して日当たりと風通しのよい場所を好みます。日光が足りないと幹が間延びして締まりのない姿になりやすいので、できるだけよく日の当たる特等席を用意してあげましょう。

## 春～秋（生長期）

- 日当たりと風通しのよい戸外で元気に育ちます。ベランダや庭で、よく日の当たる場所に置きましょう。
- 真夏の強い直射は葉焼けの原因になることがあります。盛夏は遮光ネットや半日陰に移すと安心です。
- 風通しが悪いと蒸れて病害虫が出やすくなります。株まわりの空気が動くように置き場所を工夫しましょう。

## 冬（休眠期）

- 夏型のため、寒くなると葉を落として休眠に入ります。気温が下がってきたら室内の明るい窓辺へ取り込みましょう。
- 取り込みの目安は、最低気温がおおむね10°Cを下回る頃。窓辺でもよく日が当たる場所を選びます。
- 暖房・冷房の風が直接当たる場所は乾燥や急な温度変化のもとになるため避けてください。

ラメリーなどは気温が15°Cを下回ると葉を落とし始めますが、これは休眠のサインで枯れではありません。落葉しても慌てず、水やりを控えて春を待ちましょう。

## 水やり

パキポディウム栽培でいちばん多い失敗は水のやりすぎ（過湿）による根腐れです。「乾いたらたっぷり、生長期以外は控えめ

に」というメリハリを意識すると、ぐっと育てやすくなります。

## 春～秋（生長期）

- 葉を広げて生長している間は、鉢の中の土がしっかり乾ききってから、鉢底から流れ出るまでたっぷり与えます。
- 常に湿った状態を続けるのは禁物です。次の水やりまでたったん完全に乾かすのがコツです。
- 真夏は乾燥を好むので、過湿には特に注意しましょう。

## 秋～冬（休眠期）

- 秋が深まったら水やりを徐々に減らします。
- 葉を落として休眠に入った株は断水（水を止める）か、ごく控えめ（月1～2回程度）にとどめます。休眠中の過湿は根腐れの大きな原因です。

## 肥料

- やせた土地の出身なので、肥料は控えめで十分です。
- 生長期に緩効性化成肥料を月1回程度、または薄めた液体肥料を月2回程度を目安に。与えすぎはかえって株を傷めます。

幹や枝を触ってぶよぶよと柔らかいと感じたら、根腐れが進んでいるサインかもしれません。すぐに水やりを止め、株の状態を確認しましょう。

## 用土・植替え

パキポディウムには、何よりも水はけのよい用土が欠かせません。水が長くどまる土は根腐れの原因になります。市販の多肉植物・サボテン用の培養土を使うのが手軽ですが、自分で配合すると排水性をより自由に調整できます。

## 用土の配合例

- 赤玉土（小粒）3：鹿沼土（小粒）3：軽石（小粒）2：腐葉土2 — 排水性と通気性を確保しつつ、ほどよく水分を保持する基本配合です。
- 鉢底には軽石やゴロ土を敷き、水が抜けやすくしておくことさらに安心です。

## 鉢選び

- 底穴のある通気性・排水性のよい鉢を選びましょう。素焼き鉢は乾きやすく、過湿を防ぎやすいので相性がよい鉢です。

## 植替え

- 時期：生長を始める3～5月が適期です。頻度は2年に1回を目安にします。
- 方法：古い根鉢の土を1/3ほど落とし、前回より一回り大きい鉢に植え替えます。傷んだ根や黒ずんだ根は取り除きましょう。

- 植替え後：根が落ち着くまで、植替えの前後は数日～1週間ほど水を控えると、傷口からの腐敗を防ぎやすくなります。

植替え直後にいきなりたっぷり水を与えると、傷ついた根から腐りが入りやすくなります。少し我慢して乾かし気味にし、新しい根が動き出してから通常の水やりに戻すと失敗が減ります。

## 発芽のさせ方

パキポディウムは種から育てる「実生（みしょう）」も大きな楽しみです。発芽そのものは比較的早く、コツさえ押さえれば初心者でも芽出しに成功できます。最大の敵はカビ・立枯れ。清潔さと温度・湿度の管理が成功の鍵です。播種の適期は、十分な気温が確保できる4～5月（または6～7月）です。

1. 用土を準備して消毒する — 硬質赤玉土とパーミキュライトを1:1で混ぜるなど、清潔で水はけのよい用土を用意します。表土にはパーミキュライトを薄く敷くと管理しやすくなります。播種前に熱湯をかける（または電子レンジ・オーブンで加熱する）などして用土を殺菌しておく、立枯れ予防になります。
2. 種子を前処理する — 殺菌剤（オソサイドやダコニールなど）の希釈液に種子を数時間～半日ほど浸します。発根促進剤（メネデル）を併用してもよいでしょう。これでカビの発生を抑え、発芽をそろえやすくします。
3. 種をまく（覆土はしない） — 湿らせた用土の表面に種子を置くようにまきます。パキポディウムは光を好む種子（好光性）とされ、基本的に覆土はしません。種同士が重ならないよう、間隔をあけて配置します。
4. 腰水と保湿で温度を保つ — 容器を腰水（受け皿に水を張り、底から給水させる方法）に置き、ラップや透明の蓋をして高い湿度を保ちます。発芽適温は25～30℃前後。室温が低い時期はヒーターマットなどで温度を確保しましょう。18℃を下回るとほとんど発芽しません。
5. 発芽を待つ — 条件がよければ早く2～3日、おおむね3～14日ほどで芽が出てきます（種類や個体で差があります）。ラメリーなど柱状の種は発芽が早く、グラキリスを含むロストラーツム系は5～14日ほどが目安です。
6. 発芽後は徐々に通気を確保する — 芽がそろい始めたら、蓋を少しずつずらして風通しを良くしていきます。一気に外すと急な乾燥で苗が傷むことがあるので段階的に。腰水は様子を見ながら徐々に普通の水やりへ移行します。
7. カビ対策を続ける — 実生期間中はカビ・立枯れ対策が欠かせません。数日おきに殺菌剤をスプレーし、カビた種子や倒れた芽は見つけ次第すぐ取り除きます。明るく風通しのよい場所で、徒長しないよう管理します。
8. 1年目の苗はやさしく育てる — 小さな苗は成株のように完全には休眠させず、可能なら冬も暖かく保って生長を続けさせると、丈夫に育ちやすくなります。

「2～3mmごく薄く砂やパーライトで覆う」という海外の流儀もあり、どちらでも発芽報告があります。初心者はまず覆土せず、腰水＋密閉

で湿度を保つ方法から始めると失敗が少なくおすすめです。



パキポディウムの種子を探す  
QRを読み取る / seedstock.jp

## 病害虫・トラブル

パキポディウムは丈夫な植物ですが、過湿と日光不足から来るトラブルが大半です。原因を知っておけば、ほとんどは予防できます。

### 根腐れ（最重要）

水のやりすぎや通気不良で用土が湿ったままになると起こります。幹や枝が柔らかくぶよぶよするのが代表的なサインです。見つけたら鉢から抜いて腐った根を取り除き、新しい乾いた用土に植え直します。過湿を避け、水はけのよい用土を使うことが何よりの予防です。

### 軟腐病

多湿の環境で発生しやすい病気です。風通しと水はけを良くして予防しましょう。

### 徒長（間延び）

日光不足が原因で、ひょろひょろと締まりなく伸びてしまう状態です。十分な日照（または植物育成ライト）と風通しを確保することで防げます。

### 主な害虫

- カイガラムシ — 幹や葉に寄生して養分を吸います。歯ブラシ・つまようじ・ピンセットなどで物理的に取り除くか、殺虫剤で駆除します。
- ハダニ — 高温乾燥で増え、葉裏から吸汁して白い斑点やカスリ状の傷をつけます。市販の殺虫剤や、こまめな葉水で予防・対処します。
- アブラムシ — 特に花の時期に発生しやすいので、つぼみや花まわりを観察しましょう。

実生の小さな苗は、高湿度・密植の環境で斑点性の病気やカイガラムシが出やすくなります。発芽がそろったら風通しを確保し、込み合った苗は適度に間引いて、清潔な環境を保ちましょう。

## 栽培メモ

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---